

## 【目次】

研究発表（1）レジュメ（南孝典氏）	2頁
研究発表（2）レジュメ（鈴木宗徳氏）	3頁
第9回学会、研究発表のまとめ（淵田仁氏）	4頁
第9回学会、研究発表のまとめ（熊坂元大氏）	5頁
第5回総会報告・第9回研究会報告	7頁
御園敬介先生の就職報告	7頁
研究発表募集のご案内	8頁

### 研究発表（1）

#### 現出と弁証法 —E. フィンクのヘーゲル論の核心—

南 孝典（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

フッサールの晩年の思索を語る際には、彼の助手としてその思索に密に関わっていたオイゲン・フィンク（1905-75年）の存在を無視することはできない。フッサールが自分と50歳も年の離れたフィンクを非常に高く評価していたことは、彼の残した手紙や周囲へのコメントからもうかがい知ることができるが、たとえばアメリカの現象学者マーヴィン・ファーバーに宛てた手紙の中では、フィンクについて次のように言及されている。「親愛なる友よ、フッサールについてのすべての文献にお気をつけ下さい。フィンクの論文だけが例外です。それ以外はすべて全く無理解なものです」（1937年6月18日）。

とはいえフィンクは、フッサール現象学に対してただ肯定的に関与していたわけではなく、時に師と批判的に対峙しながら、現象学をある大きな射程から捉えようとしていた。

フィンクは、フッサールの『デカルト的省察』を補完するために書いた『第六デカルト的省察』（1988年）でも示しているように、「超越論的主観性」を考察する「現象学する者」の立場の曖昧さを早くから問題として感じ取り、その問いを「現象学する者」の自己批判という形で展開することで、師の現象学を「絶対精神の非存在的な（meontisch）哲学」へと推し進めることを考えていた。こうした視点をフィンクにもたらしたのは、この当時本格的に取り組みはじめたドイツ観念論の研究、とりわけヘーゲルの研究であった。実際『第六デカルト的省察』の中でも、フッサール現象学が「超越論的観念論」として徹底されるならば、それはヘーゲルの観念論と親近性をもつものになると指摘されている。

そのような考えを抱いていたフィンクは、その後亡くなるまでの間に非常に多くのヘーゲル論を発表している。フィンクのヘーゲル論は、その代表的な作品の一つである『ヘーゲル』（1977年）の編者ヤン・ホルも指摘しているように、非常に精緻で一貫した解釈を提示しているため、その解釈の妥当性を既存のヘーゲル研究と突き合わせて論じることが、確かに興味深い作業にちがいない。

しかし今回の発表では、そうしたフィンクのヘーゲル解釈の妥当性を検証するというよりも、フィンクがヘーゲルとの対決をつうじて一体何を示そうとしているものか、その点を明らかにすることを目指して考察を展開したい。その際、ハイデガーのヘーゲル論「ヘーゲルの経験概念」（1942/3年）に対するフィンクの批判的見解、また『精神現象学』序文にある「すべては、真なるものを実体としてではな

く、それとまったく同様に主体としても把握し表現するところにかかっている」という発言についてのフイックの解釈の変化、これらが議論の中心となるだろう。フイックはヘーゲルのどのような点を高く評価し、どのような点について批判しているのか。それらの点を明確にすることで、フイックがヘーゲルとの対決をつうじて先鋭化していった問題意識（世界問題）と思想（宇宙論）を示すことを試みたい。